

# 反障害通信

06.11.26

11号

どうでもいいじゃん！

—能力主義としての「できること」の反対語—

以前、能力主義批判をしているときに、「では「できること」っていけないことなの、親が子どもが成長していくのを喜ぶ気持ちって悪いことなの」という反応がかえってきたことがあります。

青い芝の横塚さんが、日本における「障害者解放運動」の、もはや古典となった『母よ！殺すな』という本で、「障害者運動」を担ってきた障害者でさえ、自分の子どもが生まれたときに、思わず子どもが「五体満足か？」とみてしまう。そのことが自分自身の存在を否定することにつながるというのに、・・・そのことが、障害者差別の基底的なことではないか」というようなことを書いていました。そこにおいてさえ、なおかつ、そのとらわれから脱しようという被障害者の言説は出てきています。

さて、必ずしも親が子どもの成長を望んでいるわけではありません。「五歳までに子どもは親に幸せのほとんどを与える」というようなことを書いている文をみたことがあります。そういう意味で、このまま大きくならないでという思いを抱く親もいるようです。「ブリキの太鼓」という映画で、ナチス・ドイツの時代にその社会を嫌悪し、大人になりたくないと成長を止めてしまった子どもの話を描いていました。だから、「できるようになること」一般がよいこととされているわけではありません。では、逆に「できるようになること」は「障害者差別の根拠としての能力主義」として批判されることなのでしょうか？

この間で混乱があるようなのです。

「できるようになることがいい」の反対は「できないままでいい」ということではないのです。「できないままでいい」ということには「できるほうがいい」という価値観にとらわれていて反転させてみせていることです。

このあたりのことは、立岩さんが「障害はないにこしたことがない」という主張に対する細かい批判的分析をしたことにもつながっているのですが、・・・。

さて、問題は「できること」一般ではありません。たとえば東南アジアだけで広まっているガバディとかいうスポーツで「できることがいいに決まっている」というひとはいません。たとえば剣玉なども同じようなこと、「どうでもいい」とされます。

何かできることの中でむしろ、「できるべきこと」、「できるにこしたことがない」ことがあるようなのです。それをとらえ返していくと、今の産業社会とか言われるところでは、標準的人間像というものが描かれていて、それをもとに「本来できるべきこと」というような発想が生まれているようなのです。さらにそれがどこから来ているかという分析を深化していくと、身辺自立と労働力に関わるのが、「できるべきこと」「できるにこしたこ

とがないこと」となっているのではないかと言い得るのではないかと思います。

で、そこを押さえた上で、「できるべき」「できるにこしたことがない」の反対は何でしょうか？ 注意しておかねばならないのは、「できる」一般ではなく、「できるべき」「できるにこしたことがない」ということでの、いわば能力主義としての「できること」で、その反対はもうすでに書いているように「どうでもいいじゃん」ということなのではないかと思うのです。

そのあたりを取り違えると、「どうでもいいじゃん」ということを逆に、ひとが「〇〇できるようにになりたい」ということ自体を否定することになりかねません。

それはひとの意思や欲望自体を否定することもなりかねません。

むしろ、「〇〇すべき」という発想から、「何をしたいのか」というところにひとの生の軸を転換することではないでしょうか？

今の社会は一体ひとは何をしたいのか、ということがあいまいになり、何のためにそんなことをしているのか、分からない社会になっています。今の社会は、どうもお金が支配する社会なのですが、お金をもうけて何をしようとするのか、一体ひとの幸せが何であるのか、そんなことをさておいて、とにかくお金儲けをするというような社会になっています。学校における勉強も、勉強したいから勉強するでなく、試験のために勉強する、そしてその勉強したことが、学歴以外はほとんど生かされないような勉強になっています。

標準的人間像の中で、「〇〇すべき」という中で、今の社会は窒息状態に陥ってきています。それを他者に転化するようなこととして今社会的に取り上げられている「いじめ」があります。それを説教によって解決しえるというような幻想を抱いているひとがいるし、愛国心とかで幻想的な共同性の中で解決しようと錯誤の道に踏み込もうとしているひともあるようなのですが、いじめは競争原理—能力主義の中で起きてきていることです。そのことを根本的なとらえ返しをして、転換を図って行かなくてはいけないと思います。

さて、「障害者運動」の中で突き出されたことは、「障害者に住みやすい社会はみんなが住みやすい社会」ということです。その社会像を描くにあたって、どういうことが問題になるのでしょうか、ひとつのとらわれから脱していく必要があります。そのことのキーワードが「どうでもいいじゃん」ということではないかと思うのです。

繰り返しますが、「何々したい」ということに対置する「どうでもいいじゃん」でなく、「人の標準的な像としてこうあるべきだ」とか「できるにこしたことがない」とか、「〇〇できるべきだ」ということに対置する「どうでもいいじゃん」ということです。

今、日本語の「もったいない」ということばを、エコロジー的な運動のキーワードとして取り上げるような動きがでていますが、それに類比することとして、反障害運動—反差別運動のキーワードとして「どうでもいいじゃん」がとりあげられないものかと思ったりしているのですが、・・・

(み)

## お知らせ

◆ホームページは横書きのテキストファイルに近い形で作成しています。巧く印字でないひとはメールで連絡ください。また縦 2 段組みで印刷したものもあります。こちらが欲しい方も連絡もらえれば、メール・郵送にてお送りします。

## 「反情報・コミュニケーション障害」コーナー⑧

### 手話は単語が少ない???

三村洋明

以前に「新しい手話づくり」について文を書いたときにも「手話は単語が少ない」という話—錯誤についてコメントしたのですが、改めて文を起こしておきたいと思います。

そもそも言葉の比較というようなことをまず押さえておきたいと思います。単語が少ないということを主張するひとは何を言いたいのでしょうか？ どうも単語が多い「国」や「民族」の文化のほうが少ない「国」や「民族」の文化よりも優れているという発想が、その底にあるような気がしています。そこにはいわゆるグローバリゼーションという中で、自然と共生して生きる民の文化の破壊ということの中で、自然と共生して生きる民の文化を見下していく構図がそこにあります。

さて、もうひとつ押さえておかねばならないのは、「文明の野蛮に対する支配」の中で必ずしもことばが増えるわけでもないということです。それは日本における古文と現代文の比較なり、ほんの何十年間のスパンでも、むしろことば自体がどんどん貧困化している現実が起きているわけです。日本の過去の文学やことばのもつすばらしさは、まさに「をかし」といわれるようなこと、そこで昔は現代に較べてことばが少なかったなどという話が出てくることでしょうか？

さて、大急ぎで注を書き加えねばならないのですが、「文明の野蛮に対する支配」という（今時分そんな露骨な表現は少なくなっていますが、むしろ本音として生きている）グローバリゼーションの根拠となるような発想は、むしろすばらしい文化の破壊だった面も多いのではないかとわたしは思っています。

そもそも、ことば必要性の中で生まれ、使われ、必要と感じなくなったことばは死語となります。

前にも書いたのですが、選挙の立会演説会や政見放送に手話通訳をつけろという要求をしていったときに旧自治省の役人が「手話は単語が少ないから・・・」と応答した話、本末転倒というようなことです。もし、単語が少ないという面があるとしたら、（手話を第一言語にしている＝）ろう者を政治からの排除も含め、社会から排除してきた歴史から起きていることで、「原因と結果」を取り違えている発言です。この問題が将来解決されたときには、この発言は歴史的に笑い話の種にされるような非論理的な実に恥ずかしい発言なのではないでしょうか？

さて、確かに社会から排除されてきたが故のことばの少なさはあるにせよ、そこでろう者が孤独の中で生き死んでいったのでない限り（そういう状況の中に追い込まれた「聴障者」もいたのですが）、そこでの文化というものが形成されたわけで、そこでの生活の中での必要な手話の文化が花咲いていたわけです。もちろん、ろう学校での手話の禁止という同化政策の中での文化への抑圧が手話の広がりや抑制したという二重にもひどい状況もあったわけです。そういう意味でも、手話の広がりや深まりを抑制した国の責任を考えると、手話は単語が少ないから・・・という発言は許しがたい発言なのです。

それでも、手話は単語が少ないという発言は意味が分からないのです。

ことば一般の話をしてします。雪の中でいきる民—イヌイト（かつて「エスキモー」とか呼ばれていました）には、「白」という他の言語の相当することばがさらに細分化されていくつもあるという話です。まさに、必要に応じてことばは生み出されていくのです。

そもそもことばが少ない云々の話が出てくるのは、劣った民族・集団に対する差別的な気持ちから出てくることです。たとえば、英語とかドイツ語とかフランス語に対して日本語とどちらがことばが多いかという比較をするひとがいるのでしょうか？ 反欧米ナショナリストが優れた日本の文化、さらに日本語の美しさや語彙の多さということを突き出したことがあったかもしれませんが、脱亜入欧を図ろうとして来た日本においては、そんな考えた方は一般化しませんでした。そもそも比較文化論をやっているひとの常識として文化の優劣を語るなんてことはおかしいということが学的な常識になっています。

さて、もう少し具体的に考えて行きます。手話は単語が少ないという発言はどこから出てくるのでしょうか？ それはたとえば、日本語の単語の複数を手話の単語ひとつであるという話として出てきます。「ふつう」「いっぱい」「とうぜん」がひとつの手話の単語で表されるという話とその例です。でも、逆の場合もあるのです。日本語の単語ひとつを手話ではいろんな表現分けするということがあります。「使う」ということばがそうです。「手話を使う」「のこぎりを使う」「お金を使う」「頭を使う」「ひとを使う」・・・全部「使う」という表現が違ってきます。

また、日本語に手話で相当することばがないということを使うひともあります。これは、そもそも通訳なり翻訳なりということが分かっていないひとの発言です。外国語を翻訳するときどうしても日本語に変えられないことばはカタカナ表記していきます。敢えて、訳してもやはりニュアンスを伝えきれないからと、カタカナ表記を使う場合も起きています。インテグレーション（統合）とかインクルージョン（包括）という語がまさにそのようなこと。逆の場合もあります。それは日本の文化ということに根ざした語で、それを外国語に訳してもニュアンスが伝え切れないと、日本語そのままの発音をローマ字表記していく場合です。たとえば「ガイアツ」最近はやっている「モッタイナイ」など。

手話の場合も、同じようなこと。手話にないことばはカタカナ表記に似ていることとして指文字があります。

それに、そもそも手話が語彙が少ないというひとは、逆に手話の単語で日本語に相当することばがない、手話の単語で日本語に表しにくい、表すと長々なる表現というようなことを知っているのでしょうか？ たとえば、「(電車など) 待っているけど、ちっとも来ない、おかしいな！」とか「見透かされている、どうして知っているの不思議！」というようなことばをひとつの単語（後者は二つの単語で表す場合もあります）で表す、また手の動きだけでなく、表情が手話の文法を構成しているとか、手話の奥深さを知ったところで、手話の語彙が少ないという発言が出てくるのでしょうか？

どうも、わたしには聴者向けの手話講習会での手話学習に問題があるのではないかと思います。手話講習会では日本語（正確には音声言語—書記言語）の文があって、それをどう表現するのかということを中心に勉強していて、そこでは日本語⇒手話ということでの翻訳をやっているから手話の単語が少ないという話になっていくような気がします。逆に手話⇒日本語の学習を軸にしているとそんな発言はでてこないのではないかとも思えるの

です。それに、そもそもどんな手話を教えているのかの問題があります。手話講習会のほとんどは日本手話（伝統的手話）でなくて、「手指日本語」（「日本語対応手話」といわれることばを教えているからです。日本手話は日本音声—書記言語とは別の言語なのですが、「手指日本語」（「日本語対応手話」といわれる音声—書記言語に従属することばを使っているから、そこで「聴障者」が手話表現して「読み取り練習」しても、先に音声言語—書記言語があるような表現になってしまうのではないのでしょうか？ そこでは日本手話独特の表現が少なくなっていくのではないのでしょうか？

そんなことも含んで「手話は単語が少ない」という発言が出てくるのだと思うのです。実際にろう者の世界に入って交流して一緒に活動しているひとから、そんな発言は出て来ようもないのではとも思っているのですが、・・・。

## たわしの読書メモ（8）

### ・立岩真也『希望について』（青土社）

大著『私的所有論』から立岩さんの出す単行本を読み続けています。今回は短文を集約したもの。資料を丁寧に読み、他者の論を丁寧に押さえ、なおかつ自分の中で自分の論への反論を組立て、それに応答し再反論して行く、その構成には驚くべきものがあります。わたしも少しはその手法を取り入れているのかもしれませんが。そして、彼の被障害者の存在を否定する論稿を批判するその論のテーマには、「障害の否定性」の否定から論を進めようとしているわたしにとっても共鳴することがあります。

ただ、何か違うという思いを抱き続けています。ひとつは、彼が立てているのは、今の社会の枠組みがそのまま続くとして、その中で被障害者の存在の根拠を見出そうとしていることです。なぜ、今の社会の枠組みは変わらないということで問題を立てているのか、それがどうしても分からないのです。そもそも今の社会—資本主義社会における障害問題とは何かととらえたとき、わたしは、ひとが労働力の価値ということで第一義的に価値付けられる中で、その価値が絶対的相対的に劣るとして差別されることが、その差別の土台にあると押さえています。だからこそ、ひとが労働力の価値ということで第一義的に価値付けられること自体を無くさない限り、差別はなくなることではないのでしょうか？

現在、「障害者自立支援法」の制定で、その成立過程の審議の中で自民党の議員が『まだ殺してないよ』発言するなど、絶対的にもその存在を危うくさせられているのですが、どちらにしろ、今のこの社会でわたしたち被障害者は生きられないという思いをわたしは抱いています。わたしだけでもないと思います。というのは、立岩さんの「今の社会の枠組みの中で・・・」と、語られることに、その枠組みの中で生きられないという思いを抱いたひとから、無自覚的であれ、反発が起きているからです。それは誤解でもなんでもなく、その息苦しさに発することではないのでしょうか？

彼は倫理や論理なることをもって、被障害者の存在根拠を得ようとしています。ですが、そもそも相対的に価値が劣るとされるけれど、一定「社会参加」はそれなりに果たしている被障害者も抹殺されないという意味で存在を許されても、生き苦しいという思いには変わりはありません。

そもそも彼はその理論の作業で何をしようとしているのか、わたしには分からないので

す。彼は一生懸命に、差別者の説得を試みているようにわたしは感じています。そんなことで差別がなくなれば、それこそ万々歳ですが、そんなことにはなりません。差別を差別意識に極限するようなことにもなっています。立岩さんはすごい読書家ですが、マルクスの唯物史観をどうとらえられているのでしょうか？ 確かに正統派マルクス主義なるもののマルクス曲解によって、唯物史観がタダモノ史観に陥っていったということがあるのですが、彼が立てる論理は空想的社会主義者たちが、倫理によって再分配をなそうとしていたことにわたしの中でつながっています。空想的社会主義者の夢想など批判しつくされたのではないかと思うのです。

わたしは被障害者として反障害運動をどう進めるかで論を進化させようとして来ました。ですから、わたしは差別者をどう説得するかでなく、この障害差別的な社会をその世界観からどう脱するか、その土台から問題にしていかざるを得ないという思いを抱いています。その提起を被障害者の仲間に、広め深化させるために論を進め深化させようとして来ました。立場も経歴も違う立岩さんに同じような立場での論形成を願うのは無理なのではないか？

・熊野純彦『西洋哲学史 古代から中世へ』（岩波新書）

・熊野純彦『西洋哲学史 近代から現代へ』（岩波新書）

かつて、廣松さんの本を読んでいてどうしても哲学の流れを押さえておきたく、デカルトからカント、ヘーゲルを経て、青年ヘーゲル派を押さえ、そしてマルクスへ至る流れをつかみたいと勉強を始めようとしたことがあります。そのときに読んだのが、岩波文庫版のシュヴェグラーの『西洋哲学史』上下本でした。ギリシャ哲学からヘーゲルあたりまで、ざっと歴史を読めたのですが、断片の寄せ集めという感じで、読み流したというところで終わりました。

熊野さんは、廣松さんが生前期待をかけていろいろ話をしていたひと、廣松さんから直接影響を受けたもっとも若い世代のひとです。『戦後思想の一断面—哲学者—廣松渉の軌跡』（ナカニシヤ出版）という本も書いています。それで廣松さんが抱いていた課題を哲学史の中に読み込んでくれているのではと興味深く読みました。前述のシュヴェグラーの書がヘーゲルで終わっているのに、この本は現代まで続いています。過去の議論が繰り返される哲学の流れが押さえられて、何が問題になっているのかも一応分かります。哲学入門として、哲学が面白くなる本として読んでいけるのではと思います。哲学の眺望図としてこれから古典となっていく本ではないかとも思っています。

わたしの個人的収穫としては、廣松さんがカントやヘーゲルを対象化しつつ、マルクス—エンゲルスの思想をベースに、現象学、新カント派、ハイデggerを取り込み独自の物象化論、共同主観性論（四肢構造論）をねりあげていった流れのようなことをつかんだような気がしています。

もうひとつ気付いたこと、廣松さんは本を出すとき、漢字のひとつの単語を改行により分けないとかやっていたのですが、熊野さんもその手法を踏み、しかもきちっと最後の空白を作らないで文をぴたっと収めています。それだけの構成、廣松さん亡き後、「廣松哲学」の継承と展開の期待をわたしもかけているのですが、・・・。

さて、話がそれるのですが、わたしの思いようなことをつづっておきます。

わたしが理論的なことで「哲学」といわれることに踏み込んでいったのは、「差異があるから差別がある」という論理をどう突き崩していくのか、そして「障害の否定性自身はゆらぎないこととしてある」という論理をどう突き崩していくのかというところでの、差異論というようなことからの学習として始まりました。そこで出会ったのが、もう故人になった廣松渉というひとです。かれは博学、そして文献主義者と批判されるくらいの資料の読み込みをしていったひと。わたしの「哲学」といわれている分野の学習は、彼の本を読むために、彼が挙げている本をたどっていく作業として始まりました。ですが、結局未だに、原書を読めず邦訳の本を読みながらも、彼があげている基本的なところの本もほとんど読めないまま、中座しています。

今回のふたたび、哲学的なところへの遡行は、反差別論で問題になってくる構築主義というポスト構造主義とか言われる流れや、スピノザあたりまで遡行した、ドゥールズ＝ガタリや彼らと共鳴する『＜帝国＞』のネグリ&ハートと（廣松）物象化論との交叉をどうとらえるのか、言葉を換えて言えば、ポスト構造主義はパラダイム転換なしえているのかという問いかけから始めようとしているのです。そのあたりは、マルクス＝エンゲルスの流れでの主体性という問題を改めてどうとらえ返すのか、廣松哲学が決定論に陥っているという批判とどう対話していくのか、そこでのスピノザの「実体」との対話の必要性という問題意識があるのですが、・・・。

わたしの論の展開からは離れていくのですが、いまひとつ、きちんと基本的な押さえをしていきたいという思いを抱いているのです。

#### ・熊野純彦『カント 世界の限界を経験するのは可能か』（NHK 出版）

「哲学のエッセンス」というシリーズの中の一冊。コンパクトにまとめられた解説。上記の本から熊野さんの本を追う作業の中で出会いました。

カントはアンチノミー（一般には「二律背反」と訳されています）を超越論的観念論として神を産出することによって乗り切ろうとしています。

上述の書のカントの項目の精読というところで、まあ、それなりの面白さはあったのですが、カントの物自体論は廣松さんの＜そのもの＞に当たるわけですが、そのあたりのところからカントを読み解く作業まで、熊野さんがやってくれると面白かったのですが、神の産出というところで論考は終わっています。

#### ・熊野純彦『メルロ＝ポンティ 哲学者は詩人でありうるか？』（NHK 出版）

上述の「哲学のエッセンス」シリーズのひとつ。

哲学と詩という交叉しにくいと一般に思われることを、そもそもフッサールが提起したところをメルロ＝ポンティが「無言の体験を表現にもたらしることが大切である」というところで哲学と詩との共通基盤を見出そうとし、論考していたという筆者の押さえ方。メルロ＝ポンティの身体論、表情論あたりが廣松さんの論考にもたらしられたものがとらえられてきます。筆者の前項の本も含めて、色んな哲学者との対話を透かして廣松さんがわたしには現れてくることとして、面白く読み込んでいました。

・熊野純彦『ヘーゲル <他なるもの>をめぐる思考』(筑摩書房)

筆者は近代知の三項図式をいかに超えるかという難問でヘーゲルを読み解く作業をしています。ちょうど廣松さんがマルクスを創造的解釈をする中で廣松物象化論ともいうべきことを生み出したことを、筆者はヘーゲルの創造的解釈を為そうとしていると言ったら、余りにも読み込みすぎるでしょうか？

また、廣松さんの異化ということが、<そのもの>から直裁に異化するというようになっていることをとらえ返し、地が無化する中で、図が浮かび上がるという構図自体に疑問をなげかけ、地が無化しない、図自体が関係の中で浮かび上がるというようなことのとらえ返しから、異化そのものが関係の中で起きる構図を指摘しています。これは、わたしが廣松さんの論考の中で、表情論あたりで出てきた、生得的感得というようなことに、それも物象化ではないかと疑問を感じたことにもつながっているのではと思っていました。

このあたりのことは、わたしが「吃音理論」で「吃音」がいかに異化するかと問いかけていることにもつながっています。

また、ヘーゲルの他者論から、「他者を否定することは自己を否定することにつながる」というテーゼを読み解き、そこに彼の倫理学を立てようとするということにも、「差別するものは自らの存在自体を否定することにつながる」というわたしの反差別論につなげるのではと共鳴していました。

後何冊か、熊野さんの著作を読み、彼と対話したいと思っています。

## 反障害原論－障害問題のパラダイム転換のために－(9)

三村洋明

### 第1章 障害規定

#### 補講 物象化とパラダイム転換

ここで、わたしが問題にしているのは、「障害は障害者がもっているものとして歴然としてある」、ことばを変えれば「impairment は impairment として歴然としてある」という事態です。

それは、「差異は差異として歴然としてある」（これについては後述）というとらえ方を問題にすることではないかと提起しています。

そこで、わたしが援用しているのは、廣松物象化論とでもいうべきことです。

さて、最初に物象化ということばについて説明しなければなりません。

このことばがどうしても理解されていないようなのです。このことばを、固定的な観念にとらわれるというようなところの理解に収束してしまいがちです。

整理のために、最初にこのことばの使われ方の歴史について少し書いておきます。

‘物象化’に近い概念に‘物神化’という言葉があります。‘物神 (Fetisch)’という言葉葉を最初につかったのは、ド・プロスといわれています。原始宗教の「物」を神とする心性をとらえた論攷です。マルクスはこの「物神」という概念を『資本論』「第1章第4節商



品の物神的性格とその秘密」の中で援用し「人間にたいして物の関係の幻影的形態をとるのは、人間自身の特定の社会的関係であるにすぎない。したがって、類似性を見出すためには、われわれは宗教的世界の夢幻境にのがれなければならない。ここでは人間の頭脳の諸生産物が、それ自身の生命を与えられて、相互の間でまた人間との間で相関係する独立の姿に見えるのである。商品世界においても、人間の手の生産物がそのとおりに見えるのである。わたしは、これを物神礼拝と名付ける。」「彼らの（生産者の）労働自身における人々の直接に社会的な諸関係としてでなく、むしろ人々の物的な諸関係として、また物の社会的な諸関係として現われるのである。」「『資本論』は全編この物象化—物神化という概念で貫かれています（これに関する論攷は廣松編『資本論を物象化論を視軸にして読む』があります）。

物象化と物神化は少し意味が違ってきます。

物象化は広義には物神化も含んだ総体を指しますが、物神化は絶対化という意味をもっています。物象化は廣松物象化論とでもいうべき廣松さんの物象化論においては認識論的な異化の段階をいいます。いわゆる命名判断の段階としての異化です。尤も命名判断と価値判断が明確に分かれる訳ではありません。命名判断は価値判断に付きまといわれます。ただ、狭義の意味での物象化の段階では、価値判断が固定化していないとか、両義性を有しているとか、排除の場合も水平的排除として示されるとか、逆転する、流動性をもっているのに対し、物神化は、価値判断が普遍性を有しています。価値判断が、共同主観的に固定化され、広がりを持っている、「絶対化」されている事態として示し得ます。

物象化とは、マルクスの用語としては、「人と人との関係を物と物との関係としてみる」とか「社会的関係を自然的関係としてみる」というように押さえられています。

このマルクスの物象化—物神化論を受けて展開しようとした人にルカーチ（『歴史と階級意識』）がいます。だが彼はマルクスが超えんとした近代知の地平に逆戻りしてしまいました。彼の「階級意識」は青年ヘーゲル派のブルノー・バウアーの「自己意識」のエピゴーネン（亜流）にすぎません。彼は結局近代知の実体主義にとらわれています（これは廣松氏の指摘です。わたしはブルノー・バウアーをまだ読んでいません）。

さて物象化論の歴史の総てを語る力には私には毛頭ありません。

ただ、次ぎのことは指摘しえます。

ルカーチ以降スターリニズムのマルクス主義への凌駕は、物象化論の歴史を空白の時代にしました。スターリニズムの弁証法は物神化そのものであり、その自然弁証法を弁証法の基礎（土台）としておくという論理からは、物象化という視点は出てきません。

現在、物象化論はマルクスの物象化論を「認識論的に掘り下げた」廣松渉の論攷を一つの突出点としているととらえ得ます。

彼は物象化を次のように規定しています。

「人と人との社会的関係（この関係には事物的契機も媒介的・被媒介的に介在している）が、“物と物との関係”ないし“物の具えている性質”ないしはまた“自立的な物象”の相対現象する事態」（廣松渉『物象化論の構図』）。

廣松渉は（ゲシュタルト）心理学でいう地—図というところから、「図として浮かびあがる」—異化ということを物象化の端緒—根源としてとらえています。ですが、その浮かび

上がる事態を自然的なこととしてとらえないで、関係性の中で浮かび上がるというとらえ方をしています。そして、浮かび上がったことが、自然的なこととしてとらえられる中で関係性を規定していく構造があります。

もう少し補足説明をしておく、マルクスが人と人との関係、「社会」ということを物象化することの問題を押さえたうえで、あえて分かりやすく言えば社会的関係が、物と物との関係、自然的な関係としてとらえられると規定した物象化の概念を、廣松は更に突っ込んで、言語というものの生まれる出る構造ということも含めた認識論的な異化としての物象化ということにまで深化して持ち出しました。

何が問題になっているのか、それは今かなり広まってきているパラダイム転換ということを巡って明らかにしていけます。

パラダイムというのは基本的な考えの枠組みとか訳されています。過去においてもパラダイム転換ということはおきていることです。たとえば、コペルニクスやガリレオが示した地動説というのは、中世のキリスト教的な世界観から近代知といわれる地平への転換をもたらしたわけで、コペルニクスの転換ということばさえ生み出しています。

で、今問題にしているのは、現代におけるパラダイム転換ということ、これは廣松が端的に次のような文で示しています

それは、認識論的な射影においては従前の「主観—客観」図式に代えて四肢構造の範式となって現われ、存在論的な射影においては、対象界における「実体の第一次性」の了解に代えて「関係の第一次性」の対自化となって現われる。(これは論理の次元でいうならば、同一性を原基的とみる想定に対して差異性を根源的範疇に据えることを意味し、また成素的複合型に対して函数的関連型の構制を立てる存在観となり、因果論的説明原理に対して相作論的記述原理を立てる所以となる。……(略)……)

そこにおいては、いわゆる存在論的・認識論的・論理学的諸契機が統一態をなしている。

これは物(もの)的世界観から事(こと)的世界観への転換ともいわれていることで、この転換のポイントは実体主義から関係の一次性への転換にあるのではないかとわたしは押さえています。

パラダイム転換ということは、哲学のみならずすべての学において出てきています。端的にはニュートン力学的なことからアインシュタインの相対性理論を経て量子力学にいたる流れ。生物学における生態史観というようなこともそのようなこととして指摘しえますし、遺伝子工学において、遺伝子がすべてを決定していくものとして遺伝子を設定したにも関わらず、遺伝子自体がひとつの関係の中における項に過ぎないというような指摘。生物学者グールドあたりの論考にもパラダイム転換的内容を感じます。

そして差別の問題においても、反本質主義としてさまざまに語られています。フェミニズムにおけるバトラーの論考。部落差別についても『部落問題のパラダイム転換』という本が出ています。

「哲学」的には、今、パラダイム転換と言い得るようなことは大きくはふたつの流れの

中で起きています。ひとつはマルクスの流れの物象化論、もうひとつはポスト構造主義の流れです。

ポスト構造主義といってもいろんな流れがあり、わたしは未だに押さえられていません。デリダあたりの脱構築論、そしてその影響を受けた人たちの反本質主義あたりはまさにパラダイム転換の内容を持っているのではないかと考えたりしているのですが、昨今、ドールズ＝ガタリあたりになると、スピノザの「実体」を引き合いに出してきていて、「わたしたちはポスト構造主義と呼ばれたくない」というような主張もしているようです。

青年ヘーゲル派として出発したマルクス－エンゲルスの、青年ヘーゲル派批判の中身はこの実体主義批判にあったのではと思います。しかし、関係の一次性ということが関係の物象化から決定論に陥りエンゲルス晩年の反映論や弁証法の図式化の中での論考は、青年ヘーゲル派への舞い戻りのような論考としてとらえるのではないのでしょうか？ そして、スターリニズムということもそのような舞い戻りのなかで起きているという指摘もできえます。

このあたりの対象化の必要、マルクス－廣松物象化論とポスト構造主義との対話が今必要になっているのではなどと考えています。

さて、話を最初に戻します。この反障害原論で問題にしているのは何かというと、実体－属性という近代知の地平から、「障害者(という実体)が障害(という属性)をもっている」という考え方が導かれていると批判しているのです。これに対して、「障害の社会モデル」ということが「障害とは社会が障害者と規定する人たちに作った障壁と抑圧である」突き出している内容がまさに実体主義批判というパラダイム転換の内容を持っているのです。ですが、そのことを突き出した「イギリス障害学」がまだ *impairment* を留保したままで、そのこと自体をきちんととらえ返せていないし、転換しえていない、そのことを認識論的などころの掘りさげを援用して、更に深化させよう、転換をなしきろうというのが、この原論の試みです。

前に後述すると予定していたことをここでつなげます。「差異が差異として歴然としてある」というとき、そこにおける差異とはわたしの記号を援用してのとらえかえしではどうなるか？ ちょっと展開してみます。

{差異} はもしくは差別の根拠としての“差異”が主語です。述語の‘差異’はどう表せるのでしょうか？ “差異”として歴然としてあるとはいえません。トートロジー（同義反復）に陥ります。問題は<差異>、差異として浮かびあがる以前の<そのもの>としか言い得ないことが、{差異} として浮かび上がらない事態が考えられます。問題は<差異> が {差異} なり“差異”としてどうして浮かび上がったのかという問題なのです。そのことを「できること」がなぜ問題にされるのかというところからわたしは解き明かそうとしました。「できること」一般が浮かび上がるわけではない、その浮かび上がる－異化する－物象化する、ということ論考の中心にすえて論を進めてきたのです。

わたしの論のキータームがこの‘物象化’であり、廣松物象化論を援用して論を進めようとしています。どこまでやっているか危うさがあるのですが、・・・。

## HP 更新通知・掲載予定

◆「反障害通信 11 号」アップ(06/11/26)

### (編集後記)

◆巻頭言、「どうでもいいじゃん」にはふたつの思いがあって、ひとつは能力主義批判としての「どうでもいいじゃん」で、もうひとつは「ひとそれぞれの思いを大切にする」という意味では「どうでもよくない」のです。もっとすっきりした対抗することばがあればいいのですが、・・・。

◆「手話は単語が少ない」というのは手話講習会で学び、ろう者との交流が少ないひとから、繰り返してでることばです。すでに、「新しい手話づくり」に関して文を書いたときに、そのことの批判は一応書いていたのですが、改めて論考してみました。

◆「読書メモ」はまさに、自家用のメモになってしまっています。かつて図書館で辞書を何冊も積み上げ、「難解な」と言われる廣松さんの著作をリポートしながら読み込んでいった日々を思い出します。単行本になった本、著作集 5 巻に収められている文には一応目を通し、彼の文ならば、他の著者の本よりもすらすら読めるようになったのですが、勿論基礎学習がない中での読み込み、かなりの飛ばし読みをし、どこまできちんと理解しているかおぼつかないものがあります。まして、ひとにそれを伝えるとなるともう絶望的になります。メモにしかなくなっていないと内心忸怩たる思いを抱いています。

熊野さんは廣松さんから影響を受けた人の中でも廣松さんが期待していたひと、主著は押さえる作業をしたいと思っています。

◆「反障害原論」は前回「物象化論についての補講」を挟む」という予告に沿って、前の章の補講という形で入れました。読者との対話の中で、「物象化論について解説します」と約束を果たすものでもあったのですが、読書メモと同じようにどこまできちんと伝えられる、ユニバーサルな文になっているか、こんな文を書いてはいけなそうと思いつつ、書けないジレンマに陥っていました。今回はオリジナルの障害各論に踏み込みます。

## 反障害研究会

### ■会の性格規定

今、「障害」という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」に、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方の議論への参加の中で、ともに深化と広がりを探求していきたいと思っています。

### ■連絡先

E メール [hiro.ads@f7.dion.ne.jp](mailto:hiro.ads@f7.dion.ne.jp)

HP アドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>